

「苦しみの中にキリストを思う」

詩篇 22 : 1 - 21

March.29.2026

詩篇 22 : 1 - 21、題名も入れる (パワポ)

Preface

「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」という、人として口に出るこれ以上ない絶望の言葉から、詩篇 22 篇は始まります。

人として、神に見捨てられること以上に絶望的なことはないにも関わらずです。

題にあります通り、この詩篇を詠い、祈り、告白したのが、イスラエルの二代目王であったダビデという方でした。

旧約聖書を読んでいきますと、「彼ほど神から愛された人がいるだろうか」と思ってしまう程に神から愛された神の人が、ダビデという人でした。

それなのに、その神から愛された人の口から出てきた言葉が、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」という、人として口に出る極限の絶望の言葉です。

神から愛された人ダビデも、こんな言葉を口にしなければならぬ程に苦しいところを通り、砕かれ、破れ、壊れ、生きた気がしないと思ってしまうようなところを通り、生きました。

この詩篇 22 編を、じっくり、ゆっくり、一つ一つの言葉を噛みしめながら読んで行きますと、ダビデのその辛かった心境、境遇、苦しみに、心がねじれるような痛みと言いましょか、共感や同情、また今まさに苦しみに直面している生々しい怖さのような思いが沸き上がって来て、思わず涙が出てきてしまいました。

「私のうめきの言葉にもかかわらず」とか、「私は虫けらです。人間ではありません」とか、「骨がみな外れ、心はろうのように溶け、私の力は土器のかげらのように乾ききり、舌は上あごに貼り付き、死のちりの上に置かれています」というような言葉に、経験したことがあるような怖さを覚えるとともに、「ダビデでさえもそうだったんだ」という慰められるような感じも致しました。

ダビデは確かに、こんな言葉を口にせずにはいられないようなところを、神の御手の中で、神の導きの中で通らされ、生きたのだと思います。

Part One

また私たちが、この詩篇 22 篇に接するにあたって決して忘れることの出来ない、忘れてはならないのが、十字架に架かれた主イエス様が十字架上で口にされた言葉こそが、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったので

すか」という言葉だということです。

人間ではなく虫けらのように扱われ、人のそしりの的、蔑みの的となり、「主に助け出してもらえばよい。主なる神のお気に入りなのだから、その主とやらの救い出してもらえ」と嘲られ、吼えたける獅子のような、雄牛のような、犬どものような者たちに取り囲まれ、かみつかれて肉を割かれ、着ていた衣服を面白半分にくじ引きで分け奪われたというダビデの経験・描写は、正に、イエスが十字架に架けられた時の情景と全く同じであるということから、この詩篇 22 篇は、メシア詩篇とも言われています。

つまり、後に来られるメシア、キリスト・イエスがどんな形で、何のために、何をしにこの地に来られるのかを、ダビデ自身の苦しみの中に見出させて頂き、メシア到来を知らせるために書き残した預言の御言葉だということです。

ダビデは、私たちと同じように罪人であるがために通らざるを得ない、悪と暴虐で満ちたこの地を生き抜く上で経験した絶望と苦しみでしたが、その苦しみの中にキリストを見出させて頂いたということです。

ダビデの家系からお生まれになると約束されたキリストは、ダビデ自身を含むすべての人の罪のために苦しまれ、そして、その苦しみが人の救いへと繋がることを、神より知らせて頂いたということです。

そしてダビデは、ここに希望と救いを見出しました。

また神は、ダビデに、その苦しみの中で、苦しみをともにして下さるキリストを見出させ、苦しみの後のいのちを見出させて下さったということです。

ですので、詩篇 22 : 21 の後半部分からは、極限の絶望状態から賛美が口をついて出て来るような心、たましいへと変えられて行ったという変化が記されています。

詩篇 22 : 21 (後半部分) - 31 (パワポ)

(ここまでが、苦しみです。そして、この後から賛美が始まります。)

ダビデは、極限の苦しみの中に、キリストを啓示して頂きました。

どんなキリストかと言いますと、私たち罪人の罪を赦し、贖い、救うために苦しまれたキリストです。

罪に苦しむ人類を救い出すキリストです。

そして、賛美があふれ出ます。

キリストの苦しみと死が、救いとなった地の果てのすべての者たちが、主なる神の前に帰って来て、主の御前にひれ伏すようになるのです。

主の前に初めて出て行くのではなく、帰ってくるのです。

即ち、元々人は、すべての人間は神のもとから出てきた生まれてきた、神を父とする存在だったけれども、その父を、家を捨てて、あてもなく彷徨うような存在となってしまった。

でもキリストの苦難が、我が罪のためだと気付いた気付かされた地の果てのすべての者たちは、このたましいが温かい記憶を昔懐かしく思い返すかのような思いとともに、主なる神の前に帰ってくるのです。

今もこうして私たちは、主の御前に帰って来て、主を拝し、イエス様がお定めになった聖餐に与るために集っております。

Part Two

説教を準備するにあたって、この詩篇 22 篇に描かれている内容を黙想していると、神というお方の極めがたいいつくしみ、あわれみ深さが思い浮かんで来ました。

どんなことが思い浮かんで来たかと言いますと、人は、割れた器・砕けた器を捨てますが、神様は、割れた器を捨てたり、砕けた器を遠ざけたりなさらないということなのです。

むしろ、割れた器を手に取り、砕けた器を引き寄せなさいます。

神様は、完璧な人をお用いなさるのではなく、砕け散った人をお用いなさり、砕け散ることが、人が神にあって歩む上で必然のことなんだと思われました。

砕け散ったとは、壊れたことを意味しますが、「壊れた」という中に、神の極めがたい神秘が込められているように思うのです。

神がお造りになった天然世界、このいのちの営みに満ちた世界は、私たちに一つの大切な霊的真理を、事実を教えてくださいます。

豊かないのちはいつでも、「壊れた、砕かれた」というところを通して現れるということです。

畑の土が砕かれると、穀物を生み出します。

穀物が砕かれると、パンとなります。

パンが砕かれると、私たちの体のエネルギーになります。

ぶどうは潰されて初めて、ぶどう酒となります。

バラも潰された時、香水となります。

人も同じなんだと思います。

母親が子を宿し、10ヶ月を過ぎると、出産の瞬間を迎えます。

子宮が開き、羊水と血が流れ、新しい命がこの世に誕生します。

貴い命は、簡単には生まれません。

美しい、素晴らしいと言えるような人生も、簡単には作られないでしょう。

円熟した成熟した人格、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのは、一朝一夕に作られるわけではないでしょう。

低くされ、破れ、砕かれ、壊れる過程を通った時、人も初めてようやく成長するんだと思います。

そして神は、そこにこそ、私たち人間に神を見出させて下さるのだと思います。

詩篇 22 篇を詠ったダビデが、詩篇 51 編では、「神へのいけにえは、砕かれた霊。打たれ、砕かれた心。神よ、あなたはそれを蔑まれません」（詩篇 51 : 17）と詠っていますが、父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体の神様は、砕かれたたましい、打たれた心を大事に、大切に思って下さいます。

主イエス様も新約聖書で、一粒の麦の例えを用いて、砕かれることの神秘を語って下さいました。

ヨハネの福音書 12 : 24 (パウロ)

壊れる、破れる、砕かれるということの逆説です。

一粒の麦が地に落ちて、皮が破け、砕け、死んだ時、初めて種の中に込められているいのちが流れ出てきます。

そして、そのいのちは芽を出し、生長し、多くの実を結ぶようになります。

破れ、壊れ、砕かれないならば、実りもありません。

Part Three

神様というお方は、私たちが尊く用いて下さる前に、先に弱くされます。

神様は、砕かれたというところ通った人を、尊くお用いになるように思いますが。

強い人は、自分の力で仕事をしますが、砕かれた人は、神様を頼ります。

聖霊なる神様の力によって働きます。

使徒パウロ先生も、自分の弱さのうちに神の力を経験しました。

2 週前にも見た聖書箇所ですが、

コリント人への手紙第二 12 : 9 (パウロ)

神の力は、私たちの強さから現れるのではなく、弱さのうちに完全に現れます。

弱さを守ることが、弱さを認めることが、弱さを保ち続けることが、真の力です。

つまり、主にある霊的訓練は、弱さを磨き、弱さを育てる訓練だということです。

訓練なのに、弱くなるのが、弱さを認めることが、その目当てです。

神を信じて強くなるのではなく、信じて弱くなるのです。

神様は、私たちをお用いなさる前に、まず先に、砕きます。

A.W.トウザーという方が、「神様は、私たちを大きくお用いなさる前に、先に深く傷つけなさいました」と言いました。

チャールズ・スポルジョンという牧師は、「主は、苦しみに生きる者から、最も立派な兵士を得る」と言いました。

確かに、神様がお用いなさった人物は、終始一貫して、苦難を通った人々でした。

ダビデも、パウロも、アブラハムも、ヤコブも、ヨセフも、ルツも、ナオミも、エリヤも、エリシャも、エレミヤも、ダニエルも、ペテロも、ヨハネもです。

彼らは皆、苦難を通して、砕かれました。

苦難を通して、謙遜になりました。

苦難を通して、柔和になりました。

苦難を通して、柔軟になりました。

苦難を通して、寛容になりました。

そして遂に、苦難を通して、主に従う人となって行きました。

ゆえに、神様の砕きは、決して壊すことが目的ではありません。

神様の御手は至って正確で、どれくらい、どれほどに、どの時点で砕けばいいのかを知っておられます。

しかし、私たちは、砕かれることが嫌いです。

でも、砕かれずして、理解や悟りもありません。

砕かれた時初めて、聖霊なる神様がともにいて下さっていて、その砕きが神からの者であることを悟ります。

聖霊様は、私たちの無知を照らし出して下さる光なるお方でもあります、その光が、私たちの中から漏れ出て、照らし出すためには、ひび割れ、砕かれなければ、その光が出てきません。

ティム・ケラーという牧師が、「福音は、ひび割れた器を通して、最も明るく輝く」と言ったことがあります、私たちの破れや割れや砕かれことは、神の力を遮る障害物ではありません。

神の力が臨む門扉であり、始まりです。

Part Four

父なる神様は、十字架にて、御子イエス様を砕きました。

イエス様は十字架にて、砕かれるためにご自身の身体を差し出して下さいました。

イスラエルの民が荒野で生活した時、岩が割れて水が流れ出たように、十字架上で引き裂かれたイエス様の体から、生ける水が流れ出てきました。

だから愛とは、時に、自分自身を砕くことなんだと思います。

十字架に架かれる前のイエス様のために、年収に匹敵する高価な香油の入った壺を割ってイエス様の頭に香油を注いだ女性は、イエス様を愛しておられるがためにそうしました。

香油の入った壺が割られた時、香油の美しい香りが広がって行きました。

そして、この女性は、ただ香油の壺を割ったのではなく、自分自身を主イエスの前に割り、砕いたのです。

神様が探しておられる人は、完璧な人ではありません。

オズワルド・チェンバーズという方が、こんなことを言いました。

「神様が、不可能だと思われることをなさる時は、不可能に思える人をお用いなさる。」

確かに、不可能に思える人モーセを用い、不可能に思える人アブラハムを用い、不可能に思える人ダビデを用いました。

ある意味人間皆、神の前にあつては、不可能な存在なんだと思います。

でも人は、それを中々認めようとはしません。

「私は可能だけれども、あの人は不可能だ」と比較意識に捉われるからです。でも、もしそうであるならば、それこそ、砕かれなければならないんだと思います。

先週の早天祈祷会で、マタイの福音書の、イエス様が十字架に架かれる前の出来事が記されている聖書箇所を学んだのですが、そこに出て来る弟子ペテロの言葉が、まさに「あの人たちには不可能だけれども、わたしには可能だ」という言葉でした。

マタイの福音書 26 : 33 (パワポ)

「あの人たちは無理ですが、私は大丈夫です。あの人たちと私は違うんです、こんな人たちと比較してもらっては困ります」というような思いです。

ペテロはこの後、幸いにも砕かれて行き、砕かれた、神にある幸いな人としてその人生を全うして行きました。

Conclusion

主なる神様は、苦しみを通して、貧しさを通して、失敗を通して、病を通して、葛藤を通して、悩みを通して割れた人、砕かれた人、破れた人をお用いなさいます。

また、そんな人を捨てたり、遠ざけたり、無視したり、価値のない者と見なしたりする代わりに、大切に、大事に思って下さいます。

それこそ、神の御業をその身に帯びた人となっていくことでしょう。

だから私たち、砕かれることを恐れる必要はありません。

砕かれた中で、恵みが育ちます。

砕かれた中で、成熟が始まります。

神様は、完璧な人をお用いなさいません。

神様は、砕かれた人を通して、完全なことを成し遂げられます。

神にあつて砕かれるということを通して、さらに主にあつて尊く用いられる恵みが、皆さんの、私たちの上に豊かにあることをお祈りいたします。

お祈りいたします。 祝祷：詩篇 22 : 27